
天空の その上で...【番外編】

高村 恵美

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

天空の その上で…【番外編】

【Nコード】

N0318E

【作者名】

高村 恵美

【あらすじ】

【天空のその上で…】に出てくる人物を使った短編集です。当ページ内イラストは全て静坤さまより頂いたものを展示しています。著作権は絵師様本人にありますので2次加工等ご遠慮ください【第三話掲載しました8/4】

遙&mp・瞭の零れ話。(前書き)

某携帯ランキングサイトノファンタジー部門において投票してくだ
さった皆様にお礼を込めて。

遙 & amp・瞭の零れ話。

浅い眠りしか貪る事が出来なくなったのは、一体いつの頃からなのだろう？

気に止まるような出来事が有った訳でもないのに、こうして真夜中に突然目が覚める。

しばらく身動きもせず、じっとしてみるが、どうにも眠れなくて、遙は仕方なく寝台から身体を起こすと、ゆっくりと辺りを見回した。

仄暗い部屋の隅では、暖炉の中で随分と小さくなった炎が、遠慮がちに躍っている。

壁に据えられた、瞬く小さな蠟燭の明かりは、程よい陰影を描き、寢室を照らし出していた。

『特に変わった様子は感じないが……』

ふと己の隣を見て、そこに存在すべき姿が無いのに気付く。いつも隣で寝ている、まだ遙の腕でも充分に包み込める、愛しい子供。歳の割に、身体が小さく線の細い子供は、自らの体型が気になつて仕方が無いらしい。

日々、身長を伸ばす努力を怠らず、あれこれ運動に励んでいると、皓から聞いた。

そんな可愛い事を真剣に悩んでいる、件くだんの子供の姿がない。

深夜こっそり子供部屋に忍び込むと、熟睡している子供の身体を、慣れた手付きで、私室へ運び入れた。

寢室へ招入れる瞬間、クスツと笑った恭に、声を立てぬよう、無

言で促して。

目覚めさせぬよう細心の注意を払って、子供の身体を横たえる。毎晩繰り返す動作は、いつしか馴染んで、無駄がない。

人肌の温もりが好きだと気付いたのは、いつの頃だっただろうか？肌を通して受け取る体温は、限り無く温かく、優しいのだと、遙に教えてくれたのは、皓と恭の二人だ。

だが何故か肝心の彼等は、添い寝してくれと言う遙の願いを、頑として聞き入れてはくれなかった。

……いや、確か恭は、「遙ちゃんさえ良いのなら」と答えている最中に、皓に引きずられて何処かへさらわれて行ってしまったのだ。

しばらくの後、何故か恭を置いて、一人だけで遙の元へ戻って来た皓に「何なら黎でも良いが」と持ち掛けてはみたのだが。

黎は体温が低いから温かくはないし、精霊は気紛れだから、と皓は遙の提案を散々に否定した挙句。

「子供は体温が高いから、温かくて、気持ちいいぞ」
窓際でアビと戯れていた瞭を指して、苦し紛れに、皓はそう告げたのだ。

それ以来、遙は毎晩こうして、皓と恭の公認の下、瞭を寝室へと運び入れている。

『本当は抱っこするよりは、されたかったのだが……。しかも瞭はまだ子供だぞ？』

さすがに子供はな、と仕方なくアビを抱えて眠っていた遙だったが、拘束を嫌がるアビは、必ず遙の寝入った隙について、懐から脱走するのだ。

「全く仕方ないね……」

結局、この屋敷に居る唯一の子供が、特別深い意味もなく、ただアビのように逃げないと言う単純な理由だけで、遙の新たな獲物となった。

「瞭？」

遙は寝台から音も立てずに抜け出すと、手近にある上着を羽織り、瞭を捜して冷たい床へと足を踏み出した。

と同時に、視線の先に有る扉が、微かな音を立てながら僅かに開くと、差し込む明るい光と共に、小さな人影が、居間から寝室へ滑り込んで来て。

子供らしい丸い大きな瞳が、仄暗い部屋に遙の立ち姿を見つけ、驚いたように大きく瞬く。

「あつ！ あれ？ 遙。……ごめんなさい起こしちゃった？」

「瞭、こんな時間に寝床から抜け出して、一体どうしたんだい？」

遙が瞭の目線まで屈み込んで問う。一瞬照れくさそうに笑った瞭は、素直に遙の質問に答えた。

「お手洗いの帰りに、居間にいた師匠に頭ぐりぐりされたんだ。また遙に攫さらわれたのかーって言われて……」

「そうか」

遙は薄く笑って、屈んでいた背を伸ばすと、瞭の手を優しく掴み取る。

そのまま寝台へと遙に先導されて行きながら、瞭は不思議そうに遙を見上げた。

「ねえ遙。どうして僕は何時も遙の寝台で寝ているの？ 僕は自分の部屋で、アビと一緒に眠っていた筈なのに？」

眠る前に、アビに散々触れた後、無理矢理抱き締めて、思う存分アビのお腹の匂いも嗅いだから、間違いないと思うんだけどな。

「ふふっ」

瞭の呟きとも取れる言葉を聞流しながら、遙は瞭を寝台に寝かせつけると、自分は上着を脱いでから、傍らに滑り込んだ。

「遙?」

子供特有の温かく小さな身体を、遙は優しく両手で引き寄せると、背中と足を曲げ、包み込むようにして、瞭を柔らかく抱きしめた。

「私はこうやってお前を抱きしめるとホツとするのだが。……瞭は、私に抱きしめられるのは、嫌かい?」

「うっん! 遙ならいいよ。遙は温かいし、いい匂いがするから……私なら?」

聞き咎めた遙に、瞭は大きく頷く。

「うん。でも師匠は絶対駄目! すぐに僕を抱っこしたがるけど、髭が当たってチクチクするから、僕、嫌なんだよ」

ムツとした表情を隠す事なく他人に見せる瞭は、本当に素直で、まだまだ可愛い子供だ。

遙は瞭の温もりと、陽向ひなたの匂いを全身で感じながら、幸福感に抱かれ、ゆるゆると瞼を閉じた。

「……遙、眠ったの?」

腕の中から、しばらく遙の様子を仰ぎ見て、返事が無い事を確認すると、瞭は慌てたように、自分も強くまがた瞼を閉じた。

勿論、夢の中で遙に逢う為に。

バサッ！

間近で発生した耳障りな音のお陰で、瞭は自分がいつしか、軽い眠りに囚われていた事に気が付いた。

だらしなく床に伸びた掌から、読んでいたはずの書物が零れて、傍らに落ちてている。

いまや瞭の日課の一部となった、遙の快適な眠りを確保する為に務める、深夜の見張り。

遙の寝室へと続く扉前、居間にある長椅子に陣取り、退屈しのおぎに一人、書物に目を通していた。

「さすがに、徹夜も三日目に入ると眠いか……」

僅かに掠れた声で、他人事の様にそう呟くと、狭い長椅子から立ち上がり、身体を伸ばす。

無理な姿勢で眠った為に、身体中の筋肉が硬くなってしまっている事に気づいた瞭は、億劫な態度で、全身の緊張をゆるゆると解く作業を、開始した。

『どうしてこうも、運悪く用件が重なるのか？』と、一連の出来事を振り返り、自嘲する。

つい先日「どうしても貴方様でないと」と、名指しで依頼された難しい討伐を、速攻で終了させたばかりだ。

お礼だと催された盛大な宴を振り切り、依頼主の元から寝るのも惜しんで帰ってみれば。

「キュリリリー」

機嫌良く出迎えたアビの御飯作りから始まって、遙への報告を兼ねた事後処理。

煩雑な手続きはんざうに時間を取られ、睡眠を取るのもままならなかった。挙句、疲労が蓄積したその身に、新人から届いた手合わせの申し入れ。

男にしては随分と細い身体を持つ瞭は、時々下剋上を夢見た新顔から、こうした勝負を挑まれる。

無論、柔和に見える容姿だけで、安易に瞭の力を判断した新人は、一瞬で地を這い、途絶えた意識の底で、恐らく本当の夢を見た事だろう。

意識を手放した新顔の処置を仲間に託して、瞭は今度こそ、思う存分睡眠を貪る為に、自室へと向かう。

寢床に潜り込んだ瞬間に、意識を失えるかと考えたが、予想に反し、何故か眼が冴えて眠れなかった。

横になりながら、細い自分の腕を、目線の高さまで持ち上げると、瞭は小さく息をついた。

幼い身で遙の『力』を受けた事が、一番の要因なのだろう。

一度若返った身体は、極端に成長の速度を緩め、やがて瞭から年齢と言う概念を奪った。

『何だかなー』

幼少の頃、憧れたのは永遠の師匠である皓の勇姿。全身に程よくついた無駄のない筋肉に、不屈の精神。師匠のような姿になりたいと、何度密かに願った事か。

『されど現実には甘くない、か』

ある程度大人になっても、思い描いた理想の姿からは、程遠い。

『こればかりは、どうしようもないしな』

僅かにほろ苦い自己嫌悪を伴った感情に、瞭は唐突に昼間の出来事の回想を、打ち切った。

このまま夜もすがら、取り留めの無い事を一人、漫然まんぜんと考えたところ、答えが出る問題でもない。

『何か別の事を考えないと、落ち込みそうだ』

床から落ちた書物を拾い上げ、読書を再開する事で、出口のない

思考の切断を図る。

だが意識をしっかりと保っているつもりでも、やはり身体は相当疲れていたのだろう。

既に限界近くまで困憊した瞭の意識を容易く捉え、睡魔は、緩やかに支配を開始する。

「……」

朦朧まうろうとした瞭の意識を、忍び込んだ睡魔まぼろしが完全に制圧するまで、さほど時間は必要ではなかった。

澄んだ空気に見守られ、月光は冷めた煌めきを、惜しげもなく地上へと、注ぎ続ける。

眠る事もなく、窓から射し込む月光を見続けていた遙は、不意に寢台から身体を起こした。

『今宵の月はとても綺麗だから、久しぶりに夜の散歩でも楽しむとするか』

どうせ床についても、いつも何故か明け方近くまで眠れないのだならば時間を有効に使うべきだろう。

『うん、我ながら良い考えだ。万が一異を唱えられたら、一緒にどうかと誘えば良いしな』

しかし寢室の扉を開けたところで、遙は浮き足だった歩みを止めた。

視線の先、窮屈な長椅子から手足をはみ出させ、無防備な眠りに落ちた瞭の姿が、見える。

「こんな場所で眠るなど、一体どうした？」

軽く肩を揺すり、声をかけても反応がないほどの熟睡ぶりに、遙は「仕方ないね」と小さく笑う。

「……全くいくつになっても瞭は子供だね」

瞭が耳にすれば、確実に落ち込むであろう言葉を、遙はそっと口にして、周囲を見渡した。

居間の暖炉は完全に消えており、冷えた瞭の身体を温める毛布も、近くには見当たらない。

「これでは風邪を引いてしまう」

取り敢えず己の寢床に運ぼうかと、抱え上げた瞭の余りの軽さに、遙は小さく嘆息する。

「この子はちゃんと食事を取っているのだろうか？ 無理をしてないと良いのだが」

幼い頃から、自分の置かれた立場を見極め、無茶な背伸びをする子供。すらりとした手足を持つ身体は、とうの昔に遙の身長を越えてしまった。

少年の面影を僅かに残しながら、青年へと緩やかに、けれど確実に移行し始めた、瞭の姿。

『人間の成長は、やはり早いな……』 胸を衝く、一瞬の憂愁。

深く考えることを意識的に避けて、遙は瞭を軽々と両手で抱え上げると、己の寢室へと運び込んだ。

寢台に寝かせつけた瞭の隣に、遙は己も潜り込んで、彼が子供のころ良くそうしたように、そっと全身を抱き締める。

『子供の瞭は良く陽向の匂いがして温かった覚えがあるが。……』

『現在はどうなのだろう？』

「うーん」

寝返りと共に回された瞭の腕は、無意識に遙を胸元へと手繰り寄せた。抱き締めるつもりが逆に抱き締められて、遙は少し戸惑う。

「瞭？」

呼びかけた答えの代りに、規則正しい寝息が頭の上から降って来

て、遙は小さく笑う。

「本当に、いつまで経っても、お前は子供だね……」

子供の頃より、幾分逞しくなった胸板に遠慮なく顔を埋めると、遙は静かに瞼を閉じる。

『けれど瞭。お前のお陰で、今夜は眠れそうだよ』

「……」

眠りに落ちた遙の気配を感じて、瞭は閉じていた瞼を薄く開けた。途中から目覚めてはいたのだが、何となく起きているとは、言い出せなかった。

『遙』

自分の腕の中に収まる遙の小ささに、堪らず愛しさが込み上げる。そのまま強く抱き締めたい衝動を寸前で堪えると、瞭は大きく息を吐いた。

『遙の傍に居たいなら、変わらぬ笑顔が見たいなら、己の気持ちをお殺すしか、術はない』

幼い頃から繰り返し聞かされ続け、いつしか瞭の胸に刺青のように刻まれた、皓の言葉。

絶対の拘束力を持つこの言葉は、一体いつまで自分を縛り付けておく事が出来るだろうか。

「……けど師匠には逆らえないしな」

身を任せ、安心しきった顔で眠る遙の頭を、瞭は限りなく、ただ、

優しく撫でる。

胸を占める想いは形を変えつつあるが、いまはまだ、培ったこの信頼を大切にすべきだろう。

「お休み、遙」

悩んだ末、瞭が遙の寝顔に告げた言葉は、およそ平凡極まりなくて。

けれど瞭は満足げに微笑むと、今度こそ本当の眠りを得る為に、固く瞼を閉じた。

終

ある晴れた日の出来事（瞭&遙）（前書き）

大変遅くなりましたが、記念番外2作目です。
今回も引き続き、瞭、遙、恭。ちよつとだけ皓です。

4月度携帯にてランキングサイトをクリックして頂いた皆様、また
お題リクエストを下さった青蛙様、早村様、誠に有難うございました。

お題のリクエストは随時受け付け中です。宜しければ皆さまもお気
軽にメッセージを送って下さいね。

ではまた今月も続編でお会いできることを祈って。高村。

ある晴れた日の出来事（瞭&遙）

柔らかな陽光が、辺り一面に降り注ぐ、幸せな昼下がり。

むせ返るまでの大量の緑に覆われた庭には、等間隔で撒水機が設置され、リズム良く回転を続けながら、地面に水を撒いている。

奇跡に近い、平和で麗らかな、何より大切な、午後のほんのひと時。

遙は久し振りの休息に、柔らかな笑みを満面に浮かべ、惜しみなく周囲の樹々に振りまいていた。

「遙ー、恭兄ーお茶が入りましたよー」

遠くから聞こえる、澄んだ子供らしい瞭の声に、遙が優しい視線を流した。

呼び掛けから、程無くして、幼い瞭が懸命にお茶を運んで来る姿が、樹々越しに見て取れて。

「あっ?!」

けれど前を良く見ていなかったのだろう。地面にいた、小さな緑色の生き物を踏み付けた弾みで、瞭の足が滑る。

「わっ!」

思わず目を閉じた、瞭の身体を遙が、手放したトレーを恭が。

それぞれ間髪を入れず、平然と受け止める。

「あ……れ?!」

襲い来るべき衝撃のなさに、瞭は硬く閉じた眼を薄っすらと開けて、戸惑いながら周囲を見渡した。

転ばないための配慮だろう。背中全体に受け止めてくれた遙の感触を感じて、瞭は慌ててその場から飛び退る。

「うわっ遙!」

「うん? どうした瞭」

これ幸いと強く抱き締めていた瞭に、腕の中から逃げられて、遙は残念そうな表情を浮かべた。

「あっ、お茶は?!」

そんな遙の表情に気付かないふりをして、瞭が慌てて移した視線の先。傍らに立つ恭の手に、探す物はあった。

「ちゃんと前見てないと、危ないよー?」

茶器から一滴の液体すら零さずに、片手でトレーを受け止めた恭は、瞭の視線に優しく笑う。

「う……ごめんなさい」

恥ずかしさからか、消え入りそうな声で謝った瞭の頭を軽く撫でて、恭は更に笑みを浮かべた。

「大丈夫。瞭はちゃあんと一人で謝れたからね」

「恭兄い〜」

返された筈の恭の言葉に、瞭が感謝の意を表そうとした寸前、すかさず遙が二人の会話に割って入る。

「どうだ恭! やはり私の教育の賜物だろう」

「……」

どこか微妙に引き攣った笑顔を浮かべた恭に対し、薄い胸を反らして、得意気に威張る遙の姿。

それらを眇^{すが}めた眼差しで見つめた瞭は、深い溜め息を落とした。

『遙の教育って……何?』

少し遠くを見た瞭の頭の中で、思い起こされる一カ月ほど前の出来事。

遙の『血』を受けた人の子は、申し子と呼ばれる存在に、魂や肉体が移行する。

その申し子だけに起きる、不可思議な副作用。
飲食を断っていた瞭は、遙との『契約』を締結させた後も、なかなかベッドから起きられずにいた。
退屈な日々を幾日も重ねたある日。

『あ、意外と大丈夫かも』

確かな体調の回復を感じ、久し振りに、床へと着いた足を見て覚えた、とても小さな違和感。

『……あれ？ 僕の足、小さくなってない？』

不安に駆られ、ふと見た鏡越しに映る、酷く幼い子供の姿。

嫌というほど見知ったはずの姿を、瞭はまだ良く回らない思考でぼんやりと捉え、考える。

『！』

けれど鏡に映し出されたその意味を、正確に理解した瞬間、瞭の思考能力は再び凍り付いた。

思わず漏れた瞭の悲鳴は、恭や皓を瞭の私室へ駆け付けさせるには、充分過ぎる代物で。

「うわっ！ また随分と縮んだもんだなあ、瞭」

……笑顔と共に告げられた、底抜けに明るい皓の言葉。

「しっ……師匠のバカ！」

「なっ?! おい瞭！」

泣きながらその場を走り去った瞭を、誰が責められるだろう。

『師匠の事だから、いま考えたら、きつと悪気は無かったんだろうな』

悪意がないとはいえ、皓の余りにも配慮に欠ける無神経な言葉に、深く傷ついた瞭は、迷いの森まで一目散に逃げ込むと、大きな声で

一人泣き続けた。

「笑うなんて……ひどいや！」

奇妙に変形した根を持つ無数の立ち枯れの木が、剥き出しで大地に絡む、通称『迷いの森』

ゴツゴツとした岩肌や、苔むして不規則に隆起した地面は、独特の湿気と香りを形成している。

中でも一際大きい大木にポカリと口を開いた虚は、普段からいざという時の、瞭の避難場所だった。

『以前は屈まないと、虚へ入れなかったのに……』

小さくなつた身体。 何の苦もなく、全身がすっぽりと空洞に収まるところが、また、悲しくて。

「うっ……ひつく」

虚に抱かれるように潜んで、いったいどれくらいの時間が流れたのか、定かではなかったけれど。

次々に溢れ来る涙で、ぐちゃぐちゃに滲んだ瞭の視界を、遮るようにして映り込んだ、遙の姿。

「……随分と探したよ。ここにいたんだね」

瞭の突発的な行動を責めもせず、ただ一言「みんなとても心配しているんだよ」と告げた遙。

言葉通り、心から安堵した様子で柔らかく微笑んだ遙に、かけた心配の重さを不意に感じて、胸が痛い。

「遙っつ！」

瞭は堪えきれず虚から転がり出ると、遙に全身で抱きつき、止まぬ嗚咽を繰り返した。

「こんなに身体が冷えるまで、泣き続けていたなんて……」

「ごめんなさい。……ごめんなさい遙」

勢い良く抱きついた瞭を受け止めた遙は、冷えた身体をぎゅっと抱き締め、落ち着かせるように、声をかけながら、小さな背中を何度も撫で続ける。

「瞭、大丈夫だよ。何も心配しなくていい」

一定のリズムで頭上から降る、いつもより優しい遙の声と、全身を包む慣れた匂いに、瞭は徐々に落ち着きを取り戻したのだろう。

「…有難う遙。僕もう大丈夫だから」

頬に流れた涙の後を懸命に拭いて、瞭は顔を上げると、遙にニコリと笑って見せた。

「……だが。笑い返す遙の、何故か一行に弛まぬ腕の力に、瞭が不思議そうな表情を浮かべた瞬間。

瞭の身体は遙によって地上からフワリと抱き上げられた。

「は……遙?!」

流れる一連の動作は、瞭がまだ幼い頃にイシエフに訪ねてきた遙が、好んでよくした行動そのまま。

驚く瞭を目線の高さまで抱き上げて、遙は互いの頬をそっと重ねると瞼を閉じた。

「やはり温かいな、子供は」

「……僕は子供じゃないもん」

「そっか。瞭はもう子供ではない……か？」

遙が何気なく呟いた言葉が、余りに寂しそうな響きを含んでいた為、瞭は反抗する事も出来ず、仕方なく昔と同じように遙の頬に唇をつけると、キスを贈った。

『思い起こせば、あれが全ての始まりだったかも知れない』

溜息を一つ零して、瞭が過去の回想を打ち切ろうとした瞬間、恐れていた悪夢はやってきた。

「瞭」

遙の呼び声と共に、何の苦もなく、地面から離れる小さな足。抵抗する間もなく遙に抱え上げられ、自由を奪われる。

「遙っ！ やめてよ！」

「ぼーっとしているお前が悪い」

いつの間にか、目の前に整然と並べられたお茶とお菓子。

それらに見向きもせず、遙は瞭に対して、日常茶飯事と化した行為を行おうとしていた。

「やめてったらー！」

この先何が起こるか想像に難くない瞭は、必死で抵抗するが、所詮大人である遙の力には敵わない。

激しい抵抗の中、あの日以来繰り返される、最低最悪な時間がいま訪れた事を、瞭は知った。

「うーん柔らかいなー」

恥ずかしかつてもがく瞭の様子が、また楽しいのだろう。

くすくす笑いながら、必死で抵抗する瞭の額や頬に、遙はおもむろにキスの雨を降らす。

「ぎゃーっ！ やめてったらー」

「ふふっ。油断していた自分を怨むべきだな、瞭」

虚で泣いていたあの日、遙に抱きあげられた瞭が、キスをした事がきっかけだった。

あの日以来、子供の肌は柔らかいと、遙は事あるごとに瞭を抱き締め、顔中にキスをしたり、迫ったりするのだ。

「助けて恭兄い！」

瞭が絶叫に近い声で叫んだ瞬間、遙の腕の中から、するりと恭が瞭を奪い去る。

「駄目でしょ、遙ちゃん」

「恭……」

「きよ、恭兄い……」

遙から解放された嬉さで泣きべそを浮かべた瞭の瞳が、続けた恭

の言葉に、零れんばかりに見開かれる。

「 遙ちゃんばかりずるい」

次の瞬間、瞭は恭にぎゅーっと強く抱きしめられ、今度は恭のかさついた唇を、頬に目一杯押しつけられた。

「いやーっ!」

「んーやっぱ子供って触り心地いいねえ」

「恭もそう思うか! 子供がこんなに気持ちいい生き物だとは思わなかったぞ!」

瞭の意思は何のその。 恭の言葉に遙が弾かれたように賛同し、嬉しそうに二人は子供の柔らかかさについて、話し出した。

「あつ! 助けて下さい師匠ーっ」

ワラにも縋^{すが}る思いなのだろう。 恭の腕に拘束されたまま、瞭が偶然傍らを通りかかった皓に、手を伸ばして助けを求める。

「お前ら……また瞭で遊んでいるのか」

もはや見慣れたその光景に、かける言葉も思いつかない皓は、単刀直入に恭に声をかけた。

「恭、頼むからその辺にしておけ」

「ええーっ! 俺まだ何にもしてないよ。折角、ぼんで癒されようと思ったのに……くすん」

言いながら、さらに頬を寄せる恭に、瞭が激しく暴れると「師匠ー」と情けない悲鳴を上げる。

「ちっ」

眼の前の惨状に、舌打ち一つで皓は瞭を奪い取ると、そのまま片手で抱えあげ、諸悪の根源と化した遙と恭を、脅しついでに鋭い眼光で睨みつけた。

「楽しいお茶の時間は、終わりだ。訓練があるから、こいつは連れてくぞ」

地の底より低い声音で皓はそれだけを告げると、瞭を降ろす事なく踵かかとを返して、中庭を後にした。

「師匠。ありがとうございました」

地面に降ろされるなり、瞭が礼儀正しく、ぺこりと頭を下げる。

「なあに、助けついでだ」

「？ 誰か他にも？」

不思議そうな顔をした瞭に、皓は優しく笑うと、大事そうに握り締めていた反対側の掌を、そっと広げて見せる。

「か……蛙？」

大きな皓の掌に、小さな緑の生き物。怪我を負った哀れなその姿に、瞭は先刻、自分が何を踏んだのかを知った。

「ご、ごめんなさい師匠。きっとこの子の怪我は、僕の所為です」

「？」

「師匠、先に遙にこの子の怪我を治してくれるように、頼んで来ていいですか？」

散々遙達に弄ばれたくせに、何か有れば直ぐ当の遙に助けを求める瞭の様子に、皓は苦笑いを浮かべると、「早く戻ってこいよ」と送り出した。

その後訓練を終えた瞭は、廊下の片隅でアビの前足に押さえ込まれ、舐めたくらわれている青蛙を発見する。

すっかり元気になったその蛙を私室に持ち帰り、しこたま遊んだ後、一緒に眠りに着いた。

天空の その上で...【番外編】

追伸

瞭はどちらかと言いつと、寝相しんそうは良い方だ。

寂しいウサギのように……【前編】 瞭&mp;遙(前書き)

大変お待たせ致しました。ランキングクリックお礼小説2か月分です。

今後は体調も考え、不定期更新とさせて頂きますが、忘れた頃にまた短編を作成しようと考えています。
引き続き応援頂けたら幸いです。

「いったいこれは？」

深夜、と言うよりは殆ど明け方に近い時間帯。

与えられた任を終え、久し振りに自室に戻った瞭は、眼の前に展開された意外な光景に、言葉も無くただ茫然と見つめる事ではか対応出来ずにいた。

親しい仲間から『いいか、絶対に声を上げて驚くなよ』とは聞いてはいたけれど。

「……………それが……………これか……………」

一刻も早く屋敷へと、帰路を急ぐ精神に抗うまでもなく従って。

無理を重ねて戻ってきた身体は軋み^{きし}、倒れこむような勢いで、寝室へと続く扉を開けた。

灯りを付ける動作すらもどかしく、白い敷き布に覆われた寝台目掛け身を投げ出そうとして、ふっと気付く暗闇の中の微かな息遣い。

「アビなのか？」

どこから潜り込んだのか。とにかく潰しては大変だと、近寄った先に見えた、闇に浮かぶ雪のような白い肌。

華奢な足と腕に続く、見慣れた髪や顔に、知らず眼が釘付けになる。

誰もいないはずの寝台に、瞭の精神に残った僅かな気力まで奪い去りそうな、遙の無防備な寝顔。

『瞭が帰って来たときの顔がさぞや見物だな』

目的の地へ赴く前に、複数の仲間から聞かされた異口同音。

「……………遙？ ………………どうして貴女がここに？」

それはおよそ三週間前まで遡る出来事に起因する。

『町で起こった原因不明の怪異な現象を、当地に赴いて調査の上、早急に片付けて欲しい』

熟練者を乞うと切望された時点で、原因不明と伏せられた真実は、確定したも同然だった。遠方の町からの依頼に、厄介な魔物討伐の可能性を嗅ぎ取って。

「で……お前が行く事にしたのかい？」

「ええ。状況的に私が出ないと先方も納得しないでしょう」

遙の部屋の居間で、すっかり慣習と化したお茶の時間を優雅に楽しみながら、瞭は事も無げに告げた。

熟練者を頼む。その言葉の持つ響きは難しい。素人が判断して、明らかに強者と解る為には相当な腕が要求されるからだ。任務に最適な仲間には心当たりは有るが、帰館したばかりの者に、

重ねた命令は瞭自身が下せなかった。

「ふふつ。瞭で大丈夫かい？」

「……それはどう言う意味です？」

少しばかり剣呑な眼差しになった瞭に、遙は誤解を解くこともせず、ふわりと笑う。

お前だつて本当はまだ疲れているだろうに

瞭が大きな仕事を片付けてから、まだ日は浅い。

充分に休息を取ったとは言いがたい状況下で動く事は、遙としては賛成しかねるのだが。

「……本当に、お前はいくつになっても無茶をするからね」

手解きをした者が悪かったのか。瞭は皓と似て、己に無理を重ねる部分が多い。

何もかも背負って立とうとするまでがそっくりで、遙は瞭を前に、時に言いようのない不安に襲われる。

「私はお前がとても心配なのだよ」

面と向かって伝えても逆効果にしかならないから、重ねた言葉に、無理をするなと隠した。

「……大丈夫ですよ、遙」

優しい笑いを浮かべた遙の眼に映る瞭の姿は、きつとどれだけ時が流れても、小さい子供のままなのだろう。

幼さの目立つた少年期から、心身ともに多感な青年期へ。

人一倍緩やかな成長は、ようやく瞭を庇護される立場から解放し、大人の男へと向かわせ始めていた。

細いだけの手足は、バランスの良い筋肉がついた手足に。

遙を見上げていた無垢な眼差しは、いまや様々な感情を込めて見下ろす高さになくなった。

「……遙、変わらないのは貴女だけで、私はもう子供じゃないんですかね」

気付かれないように、そつと溜息を一つ。

遙の度を越した鈍さは、いまに始まった事じゃない。

一人前の男として意識して貰うには、師匠である皓や恭のように、少しずつ、けれど着実に距離を詰めるしかないのだろう。

「まあ、下手をしたら師匠達ですら、未だに子供扱いだからな」

俺が子供だと?!

「恭兄は苦笑を浮かべる程度で済むだろうけど、師匠なら確実に暴れるよな……」

容易に想像がつく皓の態度。ある意味子供には違いないかと考えて、瞭は少しばかり口元を綻はらばした。

唇に浮かんだ小さな笑いに、ほんの少しだけ首を傾げて、遙が問う。

「で、幾日くらいの予定を考えているんだい？」

「大体、一月ほどは見ていますが、状況次第ですからね」

白く細い指。優雅な動きでカップを桜色の唇へと運ぶ遙の動作が、一瞬ピタリと止まる。

「一ヶ月……! そんなに長くか?」

驚いたように見開かれた碧の瞳が、瞭を正面から捉えた後、不安定に揺れて伏せられた。

「ええ。どう見積もっても、その程度はかかるでしょう」

続けられた言葉に、遙はティーカップに視線を落としたまま、小さな声で「そうか」と呟いた。

淋しいのだと、言葉よりも雄弁に語る遙の態度に、瞭の秘めた気持ちがかげにざわめいて。

『遙、貴女はいつもそうやって無意識に私を誘う』

伏せられる長い睫が。 気落ちした華奢な肩が。 震える唇から

吐き出された溜息の切なさに、眩暈めまいすら覚えそうだ。

『もしかしたら自分は、貴女にとって特別な存在なのか？』と勘違いをさせる遙の態度。

いいか、瞭。遙の傍に居たいなら、変わらぬ笑顔が見たいなら、遙に何も期待するな。

幼い頃から何度も教えられた言葉に、夢見た淡い期待は潰えたが、まだ時折こうして瞭の胸を鈍く騒がせる。

『毎回の事とはいええ、師匠達って良くこの状態に耐えていたよな』

皓や恭は、いったいどんな気持ちで『それ』を乗り越えて来たのか。

二人がいつも驚く程の早業で、依頼を片付けて屋敷へ 遙の元へ帰っていた気持ちだが、瞭は現在になつてよく解る。

決して自分からは何も求めるなよ

『ええ。解つてますよ、師匠』

眼に見えぬ境界線を超えられないのは、精神の弱さ。

皓と恭が築き上げた三人の絆に、容易に割り込めない立場では無理も無いが、割り切れない想いは絶えず傍らまわりに付き纏まとう。

『焦らなくても時間は無限に有る、でしょう？』

胸中でいくら繰り返しても、詮せん無い葛藤を打ち棄てて。 瞭は軽い言葉でお茶の席を辞すと、意識を討伐へと切替えた。

それから三週間足らず。速攻と言っても過言ではない手際の良
さで、難解な依頼を処理し、瞭はひたすら帰路を急いだ。

倒れそうになる身体を叱咤し、前へ前へと翔け続けた果てに見え
た、懐かしい屋敷の外観。

直ぐにでも遙の部屋へ押しかけた欲望を、鍛えた自制心で胸底
深くに抑え込みながら、瞭は足早に自室へ向かった。

『なのに遙。何故当の貴女がここに？』

複雑な瞭の気持ちも知らず、大きな寝台で、子供のように小さく
丸まって眠る遙の姿。

良く見れば何処から探し出して来たのか、瞭が普段着る綿の上着
を、素肌になに羽織っただけの無防備さ。薄い布越しに透けて見
える露な姿態に、呆れて言葉が出てこない。

『見物だと言う意味が解ったよ』

幼い頃、皓や恭が居ない時に限って、何故かいつも決まって遙の
寝台で目が覚めた事を、ほろ苦い感情と共に思い出す。

抱き枕代わりに気軽に攫われる事は、身体が大きくなるにつれ次
第に無くなったが、遙が実は極度の寂しがり屋だと言う事を、瞭は
誰よりも良く知っていた。

だから肝心の二人が不在の現在、長期間に亘る仕事は敢えて入れ
ずに避けてきたのだが。

誰も居ない屋敷で、こんなに淋しそうに遙が過ごしていると
は、思ってもみなかった。

「……………ごめん……………遙」

一人にしてごめん。淋しい貴女の気持ちに気付いてあげられなく
て、本当にごめんよ

起こさないように最善の注意を払って、遙の乱れる黒髪に、そっ
と優しく唇を落とす。

途端微かな身動きを返されて心臓が跳ねるが、それ以上の反応はないようで、瞭は安堵の息を吐いた。

『そっか。そう言えば、遙は寝起きが異様に悪かったっけ』
とにかく遙には私室へ戻って貰うとするか。素早く下した判断に、迷いは欠片も無くて。

「遙、起きて？」

だが遠慮がちにかけた声や、軽く揺すった肩にも、何の反応も返さない遙を前に、瞭は途方に暮れてただ薄暗い天井を仰ぎ見る。

「どうしようかな……」

疲れた身体にソファは辛いが、さりとして同じ寝台で仲良く眠る訳にはいかないだろう。

「は・る・か」

心を鬼にして大きな声で名を呼ぶが、一向に目覚める気配が無い。
「？」

いくら寝起きが悪いとは言え、おかしくはないか？

大袈裟な動作で寝台の上に掌をつくが、案の定身体を揺らす震動にすら、反応がない。

巻き上げた空気中に、ふと漂う嗅ぎ覚えの有る甘い匂いを感じて、嫌な予感が背筋を這い上がる。

慌てて見渡した室内に、有るべき筈の物を必死で探して、瞭の視線が胡乱ごっらんに何度も宙をさまよった。

『無い……って事は』

遙が深い眠りに落ちた要因となった物は、恐らく布団の中にあるのだろう。

『ごめん遙』

薄着の遙に心の中で詫びながら、一気に引き剥がした布団の中で、背を曲げて小さくなって眠る遙の胸に、胎児のように抱かれた物を見つけて、瞭の眼が止まる。

「やっぱり！……呑んだんだ遙」

遙が胸に抱えている丸い形をした緑の瓶は、様々な果実をわざと醗酵させる為の遮光瓶だ。

瞭が好んで口にする果実酒は、どれも口当たりが非常に柔らかく、とても呑み易い甘さだが、醗酵の度合いによっては恐ろしく酔いが廻る代物ばかりだ。

酒と名の付く物をおよそ一切口にした事の無い遙が大量に呑めば、どうなるか考えるまでもない。

「どうせ甘い匂いにつられたのでしょう、貴女って」

誘われて、良く中身を確かめませず口にした遙に、自然と泣き言に近い言葉が漏れる。

何故か昔から、遙は瞭が口にする物に興味を示し、何度注意をしても、隙を見れば同じ様に口に運んでしまうのだ。

「まったくもう……だからあれほど真似をするなって言ったでしょう？」

警告を聞こうとしない遙の態度も問題だが、目に付く場所に置いたのも不適切には違いない。

取り敢えず酒瓶を引き抜こうと、盛大な溜息を吐き出してから、瞭は慎重に遙の胸元へと手を伸ばした。

「う……ん」

出来るだけ身体に触れないようにと、緩慢に行う作業に少し意識が戻ったのか、遙が小さく抗議の声を上げる。

が僅かに震えただけの臉は開きそうにもなく、複雑な想いが瞭の胸を交差する。

「警戒されていないのは、信頼されているからですか？ それとも何の意識もされてないから……ですか？」

返らない答えを知らながら、それでもぽつりと問いかける瞭の聲は、夜の闇よりも切ない。

「いつまで経っても、師匠達の次にしか見て貰えない」

遙の胸を占める、皓と恭の割合が大き過ぎて。 どんなに自己主張を叫んでも、瞭の存在は霞んでしまう。

『 ねえ遙。いつかはちゃんと、私を見てくれますか？』

幼い頃によくしたように。 眠る遙の顔に優しく両手を添えてから、そっと頬に小さく口付ける。

『 遙』

胸中に湧き立つほろ苦い想いを振り切って、 瞭は意識を無理に切替えると、再び瓶に手をかけた。

「よし、あと少し」

恐ろしく時間をかけて、ようやく瓶を引き抜いたと思った瞬間、強い力で腕を捕られ、瞭の不安定な身体が前のめりに傾ぐ。

「わっ!？」

危ない、と思った時には、押し潰す筈の遙の胸に抱き止められて息が止まりそうになる。

期待に掠れた声で、愛しい名を囁きかけた瞭の言葉は、意外にはつきりとした遙の声に遮られた。

「もっつ、瞭、じたばたしないで、朝までここで大人しく寝てなさい」「はっ?」

じたばた……ですか？

感じる違和感に、右腕で体重を支えるようにして、僅かに身体を起こすと、間近に見える遙の顔を覗きこむ。

至近距離で見る碧の瞳は、いつもの鮮やかさを失くし、けぶるような色合いを醸し出していた。

にこっ。

眼が合った途端、幼子に向かってするように、顔中で微笑んだ遙の態度に、正気の色は見えなくて。

「遙?」

恐々かけた瞭の声に、遙は更に微笑を深くすると、抱き止めていた両手を解放し、今度は頬へと掌を宛がった。

その一連の覚えがある動きに、思わず全身で抗うが、加減のない遙の力は、瞭の抵抗を物ともしない。

「さっきのお返しだ、瞭」

言葉が終わらぬうちに、眼元や鼻筋に遙の唇が降って来る。

幼少期、嫌がる子供を羽交い締めにして、恭と遙は暇さえあれば、繰り返し瞭にキスをした。まるで競い合うかのように、二人から

顔中に落とされたキスの思い出は、瞭が大人になっても深く記憶に焼き付いて離れない。

その記憶と辿るのと同じ順番で、柔らかい口付けは頬から伝うように唇へ

「遙！」

突発的に『力』を使って引き剥がした遙の両手を捉えて、瞭が吼える。

「ふふっ」

「こっ……のっ、酔っ払いつ！」

思わず毒づいた瞭にも笑うばかりで、遙は現状を正しく認識出来ていないようだ。

酔いが与える一時の痴態に、冷静さを欠いては駄目だと知りながら、無防備な姿から目が離せない。

「……どうした？ 瞭は私にキスされるのは嫌いなのかい？」

上目遣いに流された視線と、ほんのりと淡く色付く目尻に。しつとりと濡れて潤んだ碧の瞳に。

何より誘うように開かれた唇に、抗う暇もなく理性は壊されて。

「遙……」

華奢な顎を残った掌で捉え、互いの吐息を感じる近さまで、そっと顔を近付ける。

抵抗のない遙の、甘く震える禁断の紅い蕾に触れようとした瞬間

『カクン！』と音がしそうな程の勢いで、遙の頭が後ろへ仰け反る。

「!?!」

とつさに伸ばした腕の中。酔いの成せる業か、瞭の胸で気前良く意識を手放した遙に、それ以上何も手出しは出来なくて。

「なっ……何なんだよ、いったい」

思わず口を衝いて出る言葉の真相は、安堵か後悔か。同時に吐き出した嘆息に、意外な緊張を知って、瞭は苦笑った。

『まいったな。本当は私も、いつまでも貴女が望むような子供では
いられないんですけどね』

それでもまだ、何も理解出来ない遙の為に。 表面に溢れ出
た愛しい想いは、再び胸の奥深くに沈める必要が有るのだろう。

「……でも貴女が愛情を理解出来るその日まで、師匠達と同じ様に
待ちますよ」

遣る瀬無い想いを、わざと言葉に出して、客観的に心に言い聞か
せる。

瞭は大きな深呼吸を行いながら、感情を律し、極めて事務的な手
つきで遙に触れた。

意識の無い遙を寝台に改めて寝かせつけると、疲れた身体で部屋
の端にあるソファへと移動する。そのまま横になろうとして、
瞭の視線がふと、床に置いた果実酒の瓶に注がれた。

「酔いたい時に限って、肝心の酒は無い、か。……いや待てよ」

まだ中身が残っているかも知れないと考えて、床から持ち上げる
と瓶の口を開けてみる。 がしかし、遙は全量を飲み干したようで、
覗いた口からは液体は見えなかった。

「やっぱり残ってないか……あれ？」

鼻先をくすぐる、甘い果実の匂い。 開けた瓶を前に漂う違和感
を覚えて、瞭は怠けがちな頭脳を何とか働かすと、結論を出した。

「酒の匂いが全くしない。……果物の匂いだけだ」

軽く混乱する思考の中、可能な限り瓶の中に何を入れたのかを、
思い出して見る。

そういえば遠征へ向かう直前に、イシエフに住む友人が、酒にす
る果実をわざわざ屋敷まで届けてくれたのだ。

普段目にしない珍しい果実を、忙しい瞭に変わって瓶一杯に詰め
込みながら、「自然醗酵はしないから、後できちんと手を加えるよ
うに」と友人は言っていなかったか？

「……忘れてた」

友人の話を虚聞きした瞭は、醗酵させる為の下準備を忘れて、何

もせずに屋敷を出たのだ。

『じゃあ、中身は酒ではない筈では？』

感じた疑問に、甘ったるい匂いを放つ酒瓶を逆さにし、ぽんぽんと無造作に掌に叩き付けた。

落ちた少量の雫を、掌から直に舐め取って、瞭が小さく呻く。

若干舌に妙な刺激はあるが、やはりただ甘いだけの飲み物だ。

「遙。まさか貴女、こんな物で酔ったの？」

寢台で健やかな寝息を立てる遙をしばし言葉も無く見つめてから、瞭は更に疲れた身体を鞭打ち、傍らのソファ―に横たわる。

「……師匠。何か色んな意味で挫けそうです」

それでも萎^なえた精神に、眠気は直ぐに訪れて。

芽生えた虚しい考えを放棄する事に決めた瞭は、訪れた優しい暗闇に意識を委ね、束の間の眠りに落ちた。

翌朝。窓から柔らかく差し込んだ日差しと、頭に響く鈍い痛み

のせいで、遙は眼が覚めた。

『ここは……瞭の部屋か？』

どこか薄ぼんやりとした記憶で、昨夜の行動を思い返してみる。

皓や恭の不在時にしていた事と同様に、なかなか帰館しない瞭の部屋で、寂しさを紛らわす為に、彼の匂いを探した。

気に入った人間の匂いに包まれると、とても安心出来るのだが、

瞭は皓達と違って、大きくなってからは、何故か遙を抱き締める行為を一切しなくなった。

『いったい何故、瞭は私を避ける？』

巧妙に振舞ってはいるが、二人きりになるのを敢えて避ける瞭の態度に、気付かない遙ではない。

鬱々(うつうつ)と考えながらも探し出した瞭の服に、それでも僅かな温もりを感じられる気がして、遙は素肌^{すみ}に直に纏うと、更に

匂いに溢れた寝台へと足を向けた。

『瞭は私が嫌いなのかもな』

幼い頃は無条件で懐いていた瞭が、せきりょうかん 齢を重ねるにつれ、次第に手元から離れていく。

胸を占める寂寥感に苛まれながらも、当然の反応かと、遙はぎこちない笑みを浮かべた。

『申し子は卵と違って、私に魅了される事はない。……だから仕方が無いね』

小さくて可愛い幼子は、もう居ない。 瞭に対する認識をいい加減改める時が来たのだらう。

『でも瞭』

出来ればいつまでも子供のままでいて欲しかったと、整理のつかない感情に、精神が揺れる。

『ああ 私はこんなにも欲張りだ』

誰からも好かれない、そんな考えは持つてはいけない。 申し子は契約の破棄すら、可能なのだから。

『皓……恭』

閉じた瞼に鮮やかに浮かぶ二人の姿に。 まだ大丈夫。 私は耐えられる

「ね……眠れない。何故だ？」

堂々巡りの思考が、穏やかな睡眠の邪魔をするのか。

何か安眠の手助けになるものはないかと、暗闇で眼を見開いたまま、遙は周囲を見渡した。

『あれは酒、か？』

確か皓が恭が、眠れない晩には少量の酒を飲むと良い、と言っていた覚えが有る。

迷いも無く引き寄せた瓶の中身は、甘く美味しそうな匂いが漂って、嫌な感じはしなかった。

大きい瓶なので、少し貰っても構わないだろうと飲んだ一口は、舌に妙な刺激こそ有ったものの、遙の好みの味だった。

「美味しい」

それからついつい手が止まらなくなって……そして。

……何故か朝から、頭が痛い？ いつの間に眠ってしまったのか、記憶にないのは何故なのだろう？

「私は何を」

「目が覚めましたか？」

思わず漏らした呟きに、後方から慣れた声が返って、遙は顔を綻ばせた。

「瞭？ 帰ったのか！」

「遙、大人しくした方が貴女の為ですよ」

瞭の言葉に怪訝な思いを抱くまでもなく、勢い良く振り返った遙を襲う、猛烈な頭痛。それが、いわゆる二日酔いだと言うことに、知識のない遙は気付かない。

「なっ?!」

「……やっぱりあれで酔ったんですね、遙」

溜息と共に意味の解らない独り言を呟きながら、瞭が手にした何かを乱暴に差し出した。

「これは？」

仄かな湯気をたてた薬湯の臭いに、遙が整った眉根を寄せると、瞭は有無を言わず器を押しつけ、声を低めた。

「頭痛によく効きますから、飲んで下さい」

「もし嫌だと言ったら？」

私が大の薬湯嫌いなのは、お前も知っているだろう？ 続けた遙の言葉に、瞭は一層感情のこもらない無機質な声音で脅すように答えた。

「無理矢理に飲ますだけです」

瞭から微かな怒りの波動を感じて、遙は渋々薬湯の器を受け取ると、一息に飲み干した。

「朝から何をそんなに怒っているんだ、瞭は？」

「疲れているのかと、器を返しながら重ねた言葉に、瞭は大袈裟な溜め息を零して見せる。

「昨夜貴女が、私が置いておいた緑の瓶の中身を、全部飲んだからです」

「そんな事は無い。少し貰っただけだ」

「瞭の一方的な言い分に、即座に強く言い返した声は、脳内を反響し、頭痛となつて遙に跳ね返る。

「確認しましたが、瓶の中は空でした。遙が患っている症状は、その中身の所為ですよ」

「……」

『割れるような頭痛が、あんなに美味しかった飲み物の副作用だったとは、知らなかった』

「瞭は普段から嘘や冗談を気軽に口にする性格ではないから、多分本当の事なのだろう。」

「確かな記憶が残っていないので、遙には何とも言えないが、

『成る程、瞭は大切にしていた酒を全部飲まれたから、機嫌が悪かったのか』と結論付けて。

「しかし記憶障害までもたらす危険な飲み物を、人間は何故飲みたがるのだろうか？」

「首を傾げながら、そう瞭に質問しようとして、結局遙は言葉を発する事なく黙り込んだ。

「答えを聞いたところで所詮、理解出来ないに違いない問いに、要らぬ頭痛を誘う必要はない。」

「瞭……」

「もう少し眠ると良いですよ。次に目が覚めた時には、恐らく頭痛も取れていますから」

「詫びを含んだ呼びかけに、いつもの優しい表情を取り戻した瞭が、再びゆつくりと遙を寝台に寝かし付ける。

「瞭は、寝ないのか？」

「私は、隣で報告書でも作成しますよ」

「だがお前も昨夜は余り眠ってないのだろう。久しぶりに私と一緒に朝寝坊をしてみないか？」

言葉上はあくまでも問いかけで。だが寂しいのだと、上目遣いに訴える遙に、瞭はしばし考える。

「そうですね。……たまには良いかも知れません」

微笑みを交えて告げられた瞭の言葉に、遙の表情が得意げに変わる。瞭が子供の頃と同じ様に、直ぐ傍らをポンポンと叩いて、ここに入れと促した。

「……つたく子供じゃないんですがね」

ぼやきながら寝台に潜り込む瞭に、遙は無視を決め込むと、代わりに腕枕を要求した。薬湯が効いたのか、程なくして遙の規則的な寝息を耳にし、瞭も眠りに誘われる。

太陽はさほど高くなく、差し込む光は柔らかい。

周囲の静けさに誘われて、瞭は小さく欠伸を噛み殺すと遙を抱えたまま、何時の間にか深い眠りに落ちて行った。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318e/>

天空の その上で...【番外編】

2009年6月1日21時30分発行